

# 【放課後身体検査～Sギャル編～】

【放課後身体検査〜Sギャル編〜】

●タイトルコール

「ぱちぱちばいす」

「放課後身体検査〜Sギャル編〜」

●あらすじ

「主人公と恭子は、クラスメートではあるもののほとんど接点はナシ」

「もともとギャル風な女の子が苦手なこともあって、彼女のことを避けていた」

「ところが、彼女のほうは前々から「いじめやすそうな奴」と主人公に目をつけており、それを実行できるチャンスを窺っていた」

「そんな事とは全く知らない主人公。その日も普通に過ごしていたが、ついに放課後に恭子と人きりになってしまった……」

★トラップク1…忘れ物を勝手に先生に渡されたから……

●教室（夕方）

「あゝっ、だりゝっ、ちゃんと鞆の中に入れたと思ったのに……なんで忘れるかなあ」

「もうちょっと早く思い出したら良かったのに……はあゝっ、めんどゝゝっ」

「んっ？ あれ？ あんた、何してんの？ もうとっくに学校終わったのに……」

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

恭子

---

恭子

「日直？ あゝっ、ゴクローサン。それで？ 掃除でもしてたの？ っていうか日直って一人だったっけ？ もう一人いるんじゃないかった？」

恭子

「……あたし？ えっ？ あたしだっけ？ あれ？ そうだっけ？ あははっ、全然知らなかった」

恭子

「えゝ？ あたし、今日全然なんにもやんなかったよ？ あんた、なんで言わなかったの？」

恭子

「忙しそうだから？ 友達と喋ったりしてるの？ ぶはっ、それ忙しいっていう？ 変な気の遣い方してんねゝ」

恭子

「今、何してんの？ 忘れ物のチェック？ あ、そうだ。あたし、忘れ物したんだった」

恭子

「あ、そうそう。机の中に本があったっしょ。友達からの借りもんだから、そのままにしておくわけにもいなくなってさゝ」

恭子

「なくしたら絶対ガチギレされる……………」  
「あれ？ ない」

恭子

「ねえ、本は？ 机の中にあっただの見たんでしょ？ どこかやった？」

---

---

恭子

「えっ！？ 職員室！？ 先生のところ持ってたの！？ なんで！？ ……………そりゃ忘れ物だけど…………先生のところにいったら返してもらえないじゃん！ どーしてくれんのよっ！！！」

恭子

「ああゝっ、ヤバいゝっ、絶対ガチギレされるゝゝっ」

恭子

「はあ…………あんた、なんてことしてくれたのよ。今から先生んとこ行って取り返してきてよっ！」

恭子

「なんでって…………あんたのせいでしょ！ そのままにしといてくれたら回収できたのに…………！」

恭子

「もおお…………文句言われるのあたしなんだからね…………」

恭子

「ほんとにどうしょ…………何か考えないと…………落ち着いて…………落ち着いて…………まずは座って……………」

恭子

「あんまりやりたくないけど、同じもの買うしかないかな…………でも、限定品とか言ってたしなあゝ」

恭子

「ん？ 何よ？ ……机の上？ 別に普通でしょ、机の上に座るくらい」

---

---

恭子

「足？ 上げてる？ 足上げてるからなんなのよ………って、ああ、もしかしてパンツ見えた？」

恭子

「ぷぷっ、見たんでしょ。今更後ろ向いたって遅いのよ」

恭子

「ふうん、そーなんだ。あんた、人の物先生に渡したくせに、人のパンツ覗き見るような奴だったんだ」

恭子

「見るつもりはなかったって……やっぱり見たんじゃない！ この変態っ！」

恭子

「あんた……これはちょっとこのままで済ますわけにはいかないよねえ。責任とってもらわないと」

恭子

「どうやって責任とるか？ そうだな、とりあえず………あんたもパンツ見せなさいよ」

恭子

「なに驚いてんのよ。あたしだって見られたんだから、あんただって見られなきゃフェアじゃないでしょ」

恭子

「それとも、このまま逃げるつもり？ 人のパンツ見て、それでなんの償いもしないつもりなの？」

---

恭子 「……おっ、やけに素直じゃん？ それじゃ、誠意ってものを見せてもらわないとね」

恭子 「ほら……自分で脱ぎなさいよ……見ててあげるから……」

恭子 「もちろん本気よ。ほら、早く。他に誰か来てもいいの？ ……………あっ、前から見ててあげる」

★トラック２…ちよつと触っただけなのに……

恭子 「はい、どうぞ。……………ぶぶっ、何恥ずかしがってんのよ。まだ脱いでもないのに」

恭子 「そうよ。ここから見ててあげる。あんたの股間の真正面から」

恭子 「はーやーくー、脱ぎなさいってば。……………それともあたしが脱がせてあげよっか？」

恭子 「……………ああっ、もう！ じれったいんだから！ 男なら潔く脱ぎなさいよ……！」

恭子 「もうじつとして！ あたしが脱がせてあげるから！ ほらっ、手、邪魔っ！ ……………よいしょっ！」

恭子 「ぶはっ！？ 何よっ！ なんで大きくしてんのよ！ えっ！？ マジで！？ 勃起してんの！？」

---

恭子

「ええ？　ねえねえ、これってどういうこと？　まさかとは思うけど……あたしのパンツ見て、おつきくしちゃったの？」

恭子

「それって……ちよつとヤバくない？　人の物として、人のパンツ覗き見して、それで勃起とか……もう犯罪レベルじゃない」

恭子

「ダメダメ。こんな変態な事して、絶対に許さないから。もっと償ってもらわないと……」

恭子

「そうだ！　あんた、パンツも脱ぎなさいよ。勃起してるのとこ見せて。それで許してあげる」

恭子

「そんなのできないって、できるできないの話じゃないでしょ。人のパンツ見てちんこ勃起させて……その償いだって言ってるじゃない」

恭子

「恥ずかしい？　あたしだって恥ずかしいわよ。だってパンツ見られたんだもん。恥ずかしいに決まってるじゃない。っていうか、男がパンツ見せるのとは意味が違うっていうか？　ちんこまで見せてやっとフェアって感じよね？」

恭子

「ほら、手どけて。脱がしてあげるから。……それとも、明日みんなに言っちゃう？　あんたがあたしのパンツ見てちんこ勃起させてたって」

---

---

恭子

「嫌？ そりゃあ嫌よね？ だったら言う通りにしなさいよ。早くその手をどけて。抵抗するんじゃないの」

恭子

「そう……それでいいのよ。あと、ちんこもおっ立ててなさいよ。それじゃあ………」

恭子

「ふはっ………すっ………ギンギンじゃないのよ。しかも意外と大きいし………」

恭子

「へえ、これがあんたのちんこなんだ」

恭子

「先っぽ真っ赤………血管も浮き出ちゃって………もしかして、あたしに脱がされて興奮しちゃった？」

恭子

「………ねえ、これで最大？ 時間経ったからちよつと萎えたりした？ ……えーっ、自分でわかんないの？」

恭子

「せっかくならなあ………いっちばん勃起してるそこ………見たいんだけど」

恭子

「無理？ なんでよ。さっきあたしのパンツ見たじゃない。それを思い出せばいいでしょ」

恭子

「こんな状況で無理って………緊張してんの？ 普通にエロいこと考えればいいじゃない」

---



恭子

「あ、でも待って。要するにエロい気分になればいいんでしょ？ だったらあ……………こういうのはどう？」

恭子

「ふう……………ふう……………ふう……………ふう……………ふう……………ふう……………」

恭子

「何って？ ちんこに息をかけてるのよ。……………」

…ふふっ、キスでもすると思った？」

恭子

「さすがにそこまでサービスするわけないじゃない。息を吹きかけるか……………ちよっとくらいだったら、触ってあげてもいいけど？ ツンツンって」

恭子

「ツンツン。ぶぶっ、何よ今の反応。びくってしちゃって」

恭子

「興奮したりするの？ ドキドキしてもっと勃起したりしない？」

恭子

「別に指でちよっと触るくらいだったら……………こうやって……………いじってあげてもいいんだけど……………」

恭子

「ほら、ちんこの裏側をなでなで……………なでなで……………」

恭子

「あ、ちよっと硬くなってきた？ さっきより膨らんでるみたいに見えるけど……………」

---

恭子 「ねえ、どうなの？ 女の子に触られたのって初めて？ ……………ふうん、そうなんだ」

恭子 「じゃあ……………当然、童貞だよね？ だから、パンツ見ただけでちんこ勃起させちゃうんだ？」

恭子 「ふうん、こういうの初めてなんだ……………」

恭子 「じゃあ、こういうのはどう？ こうやって先っぽのほうに指を絡めて……………ちよっとシコシコする感じで……………」

恭子 「んぷあっ！？ き、きやあああっ！！！」

恭子 「ち、ちよっと！ 何してんのよ！ 普通、いきなり出す！？ っていうか出すの早すぎでしょ！！！」

恭子 「うっわ、制服にかかったし……………マジ最悪！どーしてくれんのよっ！！！」

恭子 「んうっ、くっさ……………きったな！ ちよっと……………あんたの制服貸しなさいよ！ なんで？ 拭くのよ！ 決まってんじゃない！！！」

恭子 「ああっつ、もう……………こんなの二度と着れないじゃない。あんた、弁償してもらってからね」

---

恭子

「ごめん？ 謝って済むわけじゃないじゃない！  
ちよつと触ったくらいでぶっかけるってどうい  
う神経してんのよ！」

恭子

「わざとじゃない？ 気持ちよすぎて我慢できな  
かった？ ……………はあゝっ、これだから童貞  
は」

恭子

「…………でも、そんなに気持ち良かったんだ？  
こんなに早く出しちゃうくらい…………」

恭子

「そう…………早漏なのかと思ったけど…………違うの？  
違うって言うってことは、普段はもうちよつ  
と時間がかかるってこと？」

恭子

「プッ、何慌ててんのよ。自分で言ったんじゃない。  
い。…………で、どーなの？ そういうことで  
いいの？」

恭子

「ふうん…………童貞なのに時間がかかるってことは  
…………要するに、オナニーの時間がかかるってこ  
とよね？」

恭子

「あはははっ、なにマジで照れてんのよ。キモイ  
わ。そうだ。こんな事したんだから、当然こ  
れも償ってもらわなきゃね」

恭子

「うーん…………決めた！ あんたさあ……………今こ  
こで…………オナニーしなさいよ」

★トラック３…オナニーさせて手コキして…………

---

恭子 「えっ？ じゃなくて、今ここでオナニーしなさ  
いって言ってるのよ」

恭子 「当然じゃない。そのくらい恥ずかしいこととして  
もらわないと、償いにならないでしょ」

恭子 「せっかくの機会だから、あんたのオナニーが正  
常かどうか確かめてあげるわ。……まっ、身体  
検査みたいなものだと思ったらいいんじゃない  
い？」

恭子 「ほら、つべこべ言わずにやんなさいよ。ちんこ  
握って。……どっちの手で握るの？ 右？  
左？」

恭子 「……ふふっ、そっちなね。じゃあ………始  
めなさいよ」

恭子 「そうそう………そういう感じね。………そんな  
にゆっくりなの？ 最初はこのくらい？ ふう  
ん」

恭子 「……プッ、今、声出た？ なんか気持ち良さそ  
うな感じの。………気持ちいいんだ？」

恭子 「ああ、だんだん速くなってきた。ふうん、そう  
いう握り方でやるんだ」

---

---

恭子 「いっつもそういう感じ？ 自分の部屋で、そんな感じでオナニーしてるの？ ……もしかして、毎日？」

恭子 「へえーっ、そうなんだあ………あ、でも、家では何も見ないってわけじゃないんでしょ？ なに使ってるの？」

恭子 「へっ？ じゃなくて、わかるでしょ。オカズよ、オカズ。どーせ家ではエロい画像とか動画見てシコってるでしょ？ そのくらいわかってんのよ」

恭子 「言いなさいよ。どんなの見てんの？ 正直に言わないと、みんなにバラすわよ」

恭子 「ふうん？ いっつもは清纯系のグラビアを見たり……、時々企画もののAVをねえ……。あんた、結構むつつりじゃない」

恭子 「ふふっ、でも……そういうの見てるのに、あたしのパンツで勃起しちゃったんだ？ 初めて女の子の生パン見てドキドキしちゃったわけだ？」

恭子 「あっ、手の動きが速くなった。……あははっ、さっきより声出てる。おもしろーい」

恭子 「もうすぐ？ もうすぐ出るの？ ……あ、そろそろ正面はやバイか」

---

---

恭子

「横にいれば大丈夫よね？　せっかくだから、近くから見ててあげる。今度は思いつきり前に飛ばしていいわよ」

恭子

「……………はい？　近くに來られるとダメって何？　緊張するから？　今更何言ってるのよ。さっさと出すとこ見せてよ」

恭子

「余計な事言ってるで、エロいこと考えてシコればいいんだから。簡単でしょ」

恭子

「……………だからあ、チラチラこっち見るんじゃないわよ。集中しなさいって言うてるでしょ」

恭子

「……………ねえ、どれだけ時間かかんの？　ちょっと飽きてきたんだけど。本当に出す気あるんでしょうね」

恭子

「ちんこは相変わらず勃ってるみたいだけど……………んっ？　何？」

恭子

「言い方？　何が？　ちんこのこと？　ちんこがどうしたってのよ？　……………下品？　え、何？　ちんこって言い方のこと？」

恭子

「はあ？　あんたそんなの気にすんの？　あはははっ、どんだけ純情なのよ。ちんこくらいみんな言ってるって」

---

---

恭子

「マジだって。あんた、女を綺麗なものに見すぎ。男のいないとこじゃ、みんなけっこーバンバン言ってるんだから」

恭子

「ほら、うちのいいんちよとかも純情そうに見えるけど、あいつ男の見えないとこじゃムチャクチャ言う奴だからね」

恭子

「まっ、信じらんないならそれでもいいけど……今はそれに集中しなさいよ。手え止まってない!?!」

恭子

「んんっ? 何シヨック受けてんのよ。………あっ、あんたもしかしていいんちよの事好きだったの!?!」

恭子

「あははっ、ごめんね。本性ばらしちゃった。でも、女なんてそんなもんよ。現実が知れて良かったじゃない」

恭子

「っていうか、さっさとオナってよ。あたしだって暇じゃないんだから。楽しんだら早く帰りたいし」

恭子

「そんな気分じゃなくなった? あんた、どんだけメンタル雑魚なのよ」

恭子

「……………いいわ。このまま帰るのも消化不良だし、特別サービスしたげる」

---

---

恭子

「何をつて？ 決まってるじゃない。あんたが自分でできないって言うなら……あたしがしてあげるわよ」

恭子

「ほら、手どけて。してあげるって言ってるんだから」

恭子

「なに間抜けな顔してんのよ。まさか意味わかってないんじゃないでしょうね？」

恭子

「はあ……あんたマジで童貞なんだ。この流れでしてあげるって言ったら手コキに決まってるでしょ」

恭子

「何驚いてんのよ。そーよ。手コキよ。あたしの手で、あんたのちんこシコシコしてあげるって言うてんのよ」

恭子

「いいからあたしに任せなつて！ あんただって悪い話じゃないでしょ！」

恭子

「あはっ、すっごく熱くなってる。めちやくちや期待してんじゃない」

恭子

「だいじょーぶよ。別に初めてじゃないし。………そりゃそうでしょ。この歳にもなつて未経験とか、そっちのほうが恥ずかしいわよ」

恭子

「とにかく任せなさいつてば………気持ちよーくしてあげるから」

---



---

恭子 「ふふっ、こうやって触ってみるとやっぱり大きいわね。あんたの性格と正反対」

恭子 「あははっ、何よその声。もう感じてんの？ いいわよお。好きなだけ感じちやいなさいよ。女の子から手コキしてもらえるチャンスなんて、アンタの人生これで最初で最後かもしれないし」

恭子 「最初はここまでやるつもりなかったけど……やるからには徹底的に搾り取ってあげる」

恭子 「んっ………んっ………んっ………あ、なんか出てきた。ちんこの先からぬるぬる出てきたんだけど？」

恭子 「何よ。さっきは緊張して出ないと言ってたのに、女の子に触ってもらったらもうこれ？ あんた、もしかしてこの展開狙ってたの？」

恭子 「……あははっ、そんなに思いつきり否定しなかつたってわかってるわよ。あんたにそんな事できるわけないでしょ」

恭子 「気持ちいいんだ？ ちんこシコシコされて、もうガマン汁出しちゃったんだ？」

恭子 「んっ？ 何照れてんのよ。………ええっ、ガマン汁って言い方のこと？ そこまで恥ずかしがる、普通？」

---

---

恭子

「あゝゝっ、そっか。女の子の口から、こういうの聞いたことがなかったんだ？　ちんことがガマン汁とか……」

恭子

「じゃあ……もっと聞かせてあげよっか？　ちんこシコシコしながら、超エロいこと言ってあげよっか？」

恭子

「ぷっ、あはははっ、顔真っ赤だし！　どっち？　聞きたいの？　聞きたくないの？」

恭子

「……………そう、聞きたいのね？　だったら、ちゃんとそう言いなさいよ。恭子ちゃんの口からエッチな言葉を聞きたいですって」

恭子

「ほら、言って。……………ふっ、よくできました」

恭子

「（耳元での囁き）それじゃあ、あんたのちんこ、もっと気持ち良くしちゃう。あたしの手でシコシコして、ちんこもっと硬くしてあげる」

恭子

「あははっ、また声出たし。興奮する？　耳元で女の子がエッチなこと言うのって興奮するの？　それとも……………もっと下品なほうが興奮するタイプ？」

恭子

「（耳元での囁き）聞きたい？　あたしの口からちんこって聞きたい？　もっとちんこちんこって言っほしい？」

---

---

恭子

「（耳元での囁き）ほら、ちんこシコシコ……あんたのちんこシコシコしてるのよ。ちんこの根元から先っぽまで、あたしの手でしごいてるのよ」

恭子

「（耳元での囁き）ちんこの先っぽからぬるぬるの……ほら、おちんこ汁が出てる……おちんこ汁、おちんこの亀頭に塗り塗りしてあげる」

恭子

「ん、ふふっ……どっちがいい？　ちんこのほうが好き？　おちんこのほうが興奮する？　どっちも言ってあげよっか？」

恭子

「あはっ、そうそう、その声。あんたの声……ちよっと可愛いじゃない。もっと聴かせなさいよ」

恭子

「こうやって、ちんこシコシコしてあげるから……おちんこの先っぽを包み込むようにして、おちんこ汁をちゆくちゆくさせながら擦ってあげるから……」

恭子

「だから、もっと興奮しなさいよ。ちんこおっ立てなさいよ。……特別サービスで、いっぱい言ってあげるから」

---



---

恭子

「こうやって、ちんこから出たおちんこ汁を手のひらにたっぷりつけて……それでちんこの先っぽを包み込んで……ぷぷっ、もう声出してるし……まだ擦ってないわよ」

恭子

「そうよ。このまま。このおちんこ汁でぬるぬるの手のひらで亀頭だけをぎゅってして、それを……シコシコシコシコ……シコシコシコシコ……ちんこの先っぽ、おちんこ汁でシコシコシコシコシコシコシコオオ~~~~っ!」

恭子

「あははっ、ガクガクしてるっつ、ほらあ、気持ちいいでしょう？ たまんないでしょう？ このままイかせてあげるわよ」

恭子

「ちんこをシコシコ……おちんこ汁でシコシコ……ちんこをシコシコ……おちんこ汁でシコシコ……シコシコシコシコシコ……」

恭子

「ああ、もう本当に限界なの？ イきそうなのね？ だったらちゃんと言いなさいよ。イクときはイクって。いいわね？ このまま続けてあげるから……そう……イきなさい、イっちゃいなさい」

恭子

「ほらっ、ほらほらっ、ほらほらほらあっ……」

恭子

「あっ！ あはっ、飛んだっつ、いったじやない。ちゃんとイけて……」

---

---

恭子

「え……？ まだ出るの？ えっ、えっ……まだこんなに飛ぶの？ 普通、最初の一発目が一番すごいんじゃないの？」

恭子

「うっわ、すごい！？ わっ、何これ！？ ええええっ！？ ……わっ、まだ……メチャクチャ出てるんですけど！？ マジで！？ あんた、どんだけ溜めてんのよ」

恭子

「あ………あ、落ち着いてきた？ あ、でもまだ出てる……うっわ……あんた、すご過ぎでしょ」

恭子

「………終わり、かな？ それともまだ出る？ もう少し………搾ったら出る？」

恭子

「あ、ダメ？ もう触らないほうがいいの？ ふっ………そっか。いったあとって敏感になるんだっけ？」

恭子

「まっ、いいわ。とりあえずここまでにしてあげる」

恭子

「あ………ちよっと手についちゃった。ほら、あんたの……おちんこミルク……」

恭子

「別に謝らなくていいって。こんなの………れろっ………こーゆーことだってできるんだから」

---

---

恭子 「あ、そっか。こんなの初めてよね？ あんたの  
精液舐めてくれる女の子なんて……」

恭子 「ふうん、そっかそっか……初めてかあゝっ」

恭子 「だったら……もうちょっと味わってみるの  
も悪くないかもね」

恭子 「何をするつもりなのかって？ そうねえ……ち  
んこも汚れちゃったし、綺麗にしたほうがいい  
と思わない？」

恭子 「だから……フェ・ラ・チ・オ、してあげ  
よっか？」

★トラック4…童貞ミルクのお味は……？

恭子 「は？ じゃなくて、フェラチオ！ 知ってんで  
しょ、そのくらい」

恭子 「ちんこだって汚れてるし、綺麗になるじやな  
い。それとも、そういうのは嫌だったりする  
の？」

恭子 「ふうん、その反応を見る限りだと、嫌ってわけ  
じゃなさそうね。……って、ちょっと。ま  
た勃起してきてんだけど？」

恭子 「あははっ、体は正直ってヤツ？ 本当はしゃ  
ぶってもらいたいんでしょ？」

---

---

恭子

「そのままよ。あんたは何もしなくていいから……どうせこんなのも初めてなんだろうし、しっかりおっ勃ててなさいよ」

恭子

「ん、すんすん……男の臭い……れろっ……れろっ、れろっ、れろっ、れろっ、れろっ、れろっ……」

恭子

「ぶぶっ、こんなので声出してんじゃないわよ。まだ舐めただけじゃない」

恭子

「ちんこ、綺麗にしてあげるから……れろっ、れろっ、そのまま立ってなさいよ」

恭子

「れろおっ、れろおっ、ん、はっ……れろれろれろっ、れろおっ、ん、ちゅっ、れろっ、んっ、濃い味……れろれろっ、悪くはないわね」

恭子

「ほら、先っぽのほうも……れろっ、ちゅっ……れろれろれろっ……ちゅっ、ちゅっ……ふふっ、あんたのちんこにキスしちゃった」

恭子

「あ、どーせキスも初めてなんでしょ。あははっ、口よりも先にちんこで経験しちゃったのね」

---



---

恭子

「れろっ、れろれろっ、ちゅぷっ、んっ、れろおっ、れろおっ、ん、はっれろれろれろっ……なによ、ちゅっ、まだ、先っぽから……ガマン汁出てるみたいだけど？」

恭子

「もう2回も、れろっ、出したのに、ちゅっ……まだ溜まってんの？　れろおっ……」

恭子

「別に出したかったら、ちゅぱっ、出してもいいけど……ちゅぷぷっ、れろっ、それも、ちゅぷっ、舐めてあげるし……」

恭子

「んん、ふ、フェラチオって久々だけど、れろおっ、童貞ちゃんこは初めてかも……れろおっ……」

恭子

「ん、ちゅっ、れろっ、れろおっ、んぷ、れろっ、ん、ちゅっ、れろっ、れろれろれろれろおっ……」

恭子

「あゝあ、またこんなに硬くしちゃって……れろおっ、これなら本当に、んっ、まだまだ、れろっ、出せそうね」

恭子

「ほら、裏筋のところ……れろっ、れろれろっ、集中的に、ちゅっ、舌で責めてあげる……れろれろっ……」

恭子

「ガマン汁も、ちゅっ、ちゅううっ、キスしながら、んふっ、吸い出してあげる、んんっ」

---

---

恭子

「んはあっ、ああっ……れろっ、れろっ、れろっ、れろっ、れろっ、れろおおうっ！」

恭子

「ふふっ、両脚ビクビクしてる……綺麗にしてるだけなのに、そんなに気持ちいいの？ すっごくイきそうな顔してるんだけど」

恭子

「また……イかせてあげよっか？ 今度はフェラで……れろれろっ、舐めるだけじゃなくて……啜え込んで弄んであげよっか？」

恭子

「イきたいんでしょう？ また、ちんこイきたいんでしょう？ ぢゅっ、れろっ、れろれろっ……！」

恭子

「ちよっとサービスしすぎな気はするけど……いいわよ」

恭子

「れろっ……れろっ……だったら、そうねえ……れろれろっ、ぼくのちんこしゃぶってください……って、言ってみなさい」

恭子

「そうよ。れろっ、れろれろれろっ、ちゃんと言えたら……ちゅっ、フェラでイかせてあげる」

恭子

「ほら、言いなさいって。……ふふっ、まあそれでいいわ」

---

---

恭子 「それじゃあ約束通り……………あんたのちんこ、  
しゃぶり尽くしてあげる」

恭子 「はむうっ、ん、んんっ……………んぐ、う、ん  
んんんっ……………」

恭子 「ず、ぢゅぷっ…………ぢゅぶるっ、む、んぐうっ、  
ん、んんっ、すごい、あ、むうっ……………！ 意外  
と、れぶっ、口の中、ん、パンパン……………」

恭子 「ん、んんっ、ぐ…………れろっ、ず、ちゅっ…………れ  
ろろっ、ん、ぷあ、うっ…………れろおっっ」

恭子 「ふふっ、変な声出しちゃって…………ぢゆるるっ、  
そんなにちんこ気持ちいい？」

恭子 「れろっ、ん、ぐうっ、むぐっ、ぢゆるるっ、  
ぢゅぶっ、ん、んんっ、ぬるぬる、したのが、  
出てきてる」

恭子 「ん、んんうっ、ぢゅっ…………ほら、どう？ れ  
ろおっっ、ぢゅっ、ぢゆるるっ、女の子に、れ  
ろっ、ん、ぷっ、ちんこ、しゃぶられてる、れ  
ろっ、気分は…………？」

恭子 「初めてだから、あ、んむっ、んぐっ、感動し  
ちゃった？ んんっ、ぐ、う…………んぶっ、れ  
ろっ、口の中でも、ぢゆるるっ、ちんこの先っ  
ぽ、ぢゆるるっ、舌でぺロぺロしてあげる」

---

---

恭子

「れろおっ、んぐっ、ず、ずずっ、ちゅっ、れろ  
れろっ、むぐ、う、ちゅぷっ……んんっ、ぬる  
ぬる、れろっ、どんどん出てきてる」

恭子

「んふふっ、しょっぱい……んはあっ、これが、  
れろっ、あんたのちんこの、れろっ、味なの  
ね」

恭子

「んはあっ、れろっ、ず、ちゅっ、あたし、けっ  
こーうまいのよ。こうやって、ず、ちゅっ、  
口、窄めて……ん、んんっ……ちんこの、カリ  
に引っかける感じで……ちゅぷっ、ちゅぷっ……  
……！」

恭子

「気持ちいい、でしょ、ちゅぷっ、ちよっとず  
っ、ちゅるっ、速くなるわよ、んぐっ……ん  
ぐっ……！」

恭子

「で、あんたは、ちゅるるっ、どこが、ん、ん  
んっ、いいの？　こんなふうに、む、ぐ  
ううっ、んぐぐっ……ちゅぽっ、根元のほうか  
ら、ちゅるっ、吸い上げられる感じ？」

恭子

「それとも、ん、ちゅっ、ちゅぷっ、ちゅぷっ、  
ちゅぷっ、先っぽだけ、ん、んっ、しゃぶられ  
る感じのほうが、ちゅるっ、いい？」

恭子

「んふふっ、その反応を見る限りだと、ん、れ  
ろおっ、どっちも気持ち良さそうだけど」

---

---

恭子

「れろっ、ん、むぐうつ、ちんこ、パンパン、んうつ、さっき、手コキであんなに出したのに、れろっ、ぢゅっ、まだこんなに硬くなるのね」

恭子

「れぶっ、ぢゅっ、ビクビク震えちゃって、んっ、れろっ、また大きくなってない？ ふっ、んぐっ、んぐっ、ぢゅっ、ぢゆるるるっ！」

恭子

「んっ？ 今のもいい？ ちんこ、吸い上げられると気持ちいい？ ん、ふっ、ぢゅぶっ、これが好きなら、れろっ、れろっ、ず、ぢゅっ……しばらく、集中してやってあげる」

恭子

「むぐうつ、ん、んぐ、ぢゅ、ぢゅっぶ、ぢゅぶっ、ん、ぐ、むうつ、んぐっ、んぐんぐ、う、むぐう、ぢゆるるっ、ぢゅぶっ、ず、ずっぶ……！」

恭子

「ぢゅぶうつ、むぐ、ん、んぢゆるっ、ずっぶ、ずっぶ、む、ぐ、ぐぐっ、う、んぐうつ、む、ぢゆるるっ、ずぶっ……んっ、んんっ、んぐうううつ……！」

恭子

「んぶあっ、ふ、あ……れろおっ、あ、むうつ、んぐっ……ん、ぐ、ぐぐっ、んっぶ……むぢゅっ、ぢゆるるっ、ぢゅぶっ……んんん、うつ……！」

---

---

恭子

「ん、ふふっ、ぢゅむっ、ちんこ、んぐ、う、ビクビク、してる、ん、ぢゅぶうっ、んぐっ、んぐっ、ん、ぐ、ぐぐぐっ、む、ぶっ……ぢゅぶうううっ……!」

恭子

「んぶっ、ん、んっ、どう? ぢゆるるっ、もう、むぐ、う、気持ち、いい? むぐ、ぢゅ、ぢゅぢゅっ、ぶっ、んんっ……!」

恭子

「出したかったら、んぐ、う、出しても、いいけど、ぢゆるるっ、むぐっ、さっさと出すと、ぢゅむうっ、もったいないんじゃない?」

恭子

「人生初の、ぢゆるるっ、フェラチオなんだから、んぐっ、んぐうっ、たっぷり、んぐっ、ぢゅぶっ、味わわないと、ぢゅぶっ、んぐっ、んぐう、むっ、ぢゅぶぶっ……!」

恭子

「もっと、強く、んぐっ、む、ぐううっ、ぢゆるるっ、吸い上げて、あげる、ぢゅぶっ、ず、ずっ、ぢゆるるるっ、ず、ずっぶ……んんっ、ぐ、ぢゆるるるるるるるううううっ……!」

恭子

「んふふっ、カワイイ声、んぐっ、出して、くれちゃって、ぢゅぶるっ、ん、んうっ、むぐ、ぐ、うっ、んぐうっ、んぐぐぐっ……!」

恭子

「ん、けほっ、こほっ……! ちょっと、あんた、今……腰振ったでしょ!」

---

---

恭子 「こほっ、こほっ、喉に当たったじゃない！  
じっとしてなさいよ！」

恭子 「いい？ 今度やったら途中でやめるわよ。ここ  
まで来てそれはきついでしょ？ だったら大人  
しくしてなさいよ」

恭子 「ふうっ……それじゃあもう一度……あむうっ  
……んんっ、すごい、震えてる」

恭子 「んぐっ、んぐう、む、ぢゅぶっ、いつでも、  
ぢゆるるっ、おちんこミルク、んぐ、ぢゅっ、  
出しているから、ん、んぐっ、む、ぢゆる  
るっ、ず、ぶ、ぢゅぶるるるっ！」

恭子 「ぢゅっぶ、ぢゅぶぶっ、む、ぐうっ、んぐっ、  
んぐっ、んぐうっ、む、ぐぐ、ぢゅぶっ、ぢゅ  
るるっ、む、ぐううっ……！」

恭子 「ん、ぶああっ……はあっ、れろっ、れろれ  
ろっ、ん、ふふっ、ほら、こんなに糸引いてる  
……れろおっ……！ あんたの、ちんぽのガマ  
ン汁よ、れろっ、れろれろっ、ちゅっ……！」

恭子 「んあっ……あむうっ……ん、んん、ぐっ……  
んぐうううっ……！」

---

恭子

「ぢゅぷっ、ぢゅぷっ、出そう？　むぐ、出ちゃい、そう？　んぐっ、んぐっ、む、ぢゅっ、このまま、んふっ、ぢゆるるっ、出してもいい、からね、んぐうっ、む、ぐううっ、ぢゅっぷ……！」

恭子

「むぐ、うっ、そう、よ、んんっ、フェラ、なんだし、ぢゅぷっ、口の中、に、んぐっ、出して、いいって、む、ぐうっ、言ってる、のよ」

恭子

「んふふっ、特別、サービス、う、んぐっ、んぐっ、ん、んん、んんんうっ、む、ぐううううっ………！」

恭子

「ず、ぶ、ぢゆるるっ、ぢゅぷっ、ずぶ、ぢゆるっ、む、んぐうっ、ぢゅぷっ、ぢゆるるっ、ん、むぐうううっ………！」

恭子

「そろそろ、出そう？　むぐうっ、イっても、いいわよ、ぢゆるっ、ずっぶ、ずぶずぶっ、む、んぐうっ、ぢゆるるるっ、ぢゅっぶ……全部、む、んぐうっ……受け止めて、あげる」

恭子

「んっ、んっ、んぐうっ、うう、んぐう、む、ぢゅっぶ、ぢゅぶるるっ、む、んぐうううっ、ず、ずぢゅっ、ずぢゅっ、ずぢゅっ、ぢゅぶるるっ、るるっ、ずぢゆるるるるるるるううううううっ………！」



---

恭子

「んぐうっ……!？ う、ぶっ……ん、んっ  
……むぐうっ、うっ、うぶっ……」

恭子

「こほっ、う、んんっ、こほっ、こほっ……す」  
……いっばい……ん、んんっ……ごくっ……」  
くっ、ごくっ、ごくっ、ごくっ……んううっ、  
ごくんっ」

恭子

「ぶはっ………はあっ………はあっ………はあっ……  
……結構苦しかったあ」

恭子

「ふふっ、意外とすごい量だったわね。びっくり  
しちゃった。………んんっ、喉に絡む」

恭子

「ちよっと大丈夫？ そんなにハアハアしちゃっ  
て……満足した？ さすがにこれだけ出したら  
不満はないわよねえ？」

恭子

「……って、まだ勃ってるんだ？ あんた意外と  
絶倫なのかしら……」

恭子

「さっきから思ってたんだけど……悪くなさそう  
なのよね。あんたのちんこ……。案外、相性良  
かったりしてね」

恭子

「そう、相性。……わからない？ 相性って言っ  
たら決まってるじゃない。体の相性よ」

---

---

恭子

「ええっ、ここまで言って首傾げるの？ それわざとじゃないわよね！？ ……はあ、要するにちんことまんこの相性がいいかもしれないって言ってるのよ」

恭子

「あははっ、何照れてんのよ。あんた、本当にこういう言葉に耐性ないのね」

恭子

「言ったでしょ。男子のいないところだったら、みんなちんこまんこけっこーバンバン言ってるって」

恭子

「誰々のちんこが良かったとか、まんこがきつかったとか」

恭子

「あははっ、なんで目えそらすのよ。あんたちよっとおもしろすぎ」

恭子

「なんか……ちよっとマジになってきたかも……これで終わるのってもやもやするし」

恭子

「はっ？ じゃなくて……わかるでしょ。あんただって、これで終わったら消化不良なんじゃないの？」

恭子

「……本当にわかってないんだから。もう少し勉強しなさいよね」

恭子

「まっ、童貞だから仕方ないかな。本気で想像もできてないみたいだし、教えてあげる」

---

恭子

「あたしね……スイッチ入っちゃったみたいなんだよね……ふふっ、意味わかんないでしょ。スイッチなんて言われても」

恭子

「要するに……こんなふうにしたくなっちゃったわけよ！」

恭子

「ふふっ、よく考えてみたら、あたし童貞ちゃんこって食べたことないのよね。こんなチャンス逃したらもったいないじゃない」

恭子

「わからないの？ こんなふうには押し倒されて？ さすがに想像つくでしょ」

恭子

「……はあ、本当にわかってないの？ あんたって本当に童貞なのね。こんなふうになったらやることはひとつじゃない」

恭子

「あんた……あたしとセックスしなさい」

★トラック5…童貞ちゃんをいただきます

恭子

「あははっ、何その顔っ！ どんだけ驚いてんのよ」

恭子

「そーよ、セックス。したくなっちゃったのよ。あんたのちんこしごいたりしゃぶったりしたら……だから、責任とりなさいよ」

恭子

「なんでって……女だってエロい気持ちになったりする時があるからよ」

---

恭子

「あんたいつもビクビク縮こまってるような奴だけど、こっちのほうはそうじゃないみたいだし」

恭子

「ほら、おっ勃てなさい。萎えさせるんじゃないわよ。これから入れるんだから」

恭子

「……だから、なんでまたそこでびっくりしてんのよ。セックスするって言ってんだから当たり前じゃない」

恭子

「あ……もしかして、あんた女の子のアソコ……見たことはない？ あははっ、あるわけないか！ 童貞だもんね！」

恭子

「そっかそっか、だったらそういう反応になるわよねえ。ふうくん、見たことないんだあ」

恭子

「じゃあ……どうする？」

恭子

「何がって、わからない？ わからないなら別にいいけど……残念ね、せっかくのチャンスなのに……」

恭子

「なあに？ 意味がわからないんでしょ？ だってらそんなにあわてる必要ないじゃない。……ん？ ちょっと待ってって？ 何を待つんだよ？」

---

---

恭子

「見たい？ 何を見たいの？ はっきり言ってみなさいよ。……………ふはっ！ あたしの大事なところって……………ダメダメ、もっとちゃんとはっきり言わないと」

恭子

「何を見たいのか……………はっきり言ってみなさいよ」

恭子

「そうよ。ちゃんと言ったら見せてあげる。……………嘘じゃないわよ。本当に見せるってば。見せなきゃセックスもできないし」

恭子

「見たいでしょ？ したいでしょ？ こんなチャンスも二度とないかもしれないのよ？」

恭子

「あ、ちんこがビクツてした。本当はしたいんでしょう？ ……どうするの？ あたしは気分が乗ったけど、無理やりしようとは思わないし……………」

恭子

「ほら、どうするのか言いなさいよ。あんまり遅くなるんだったら、あたし帰るわよ」

恭子

「ふふっ、わかった？ それじゃあ言ってみなさい。……………ふふっ、いいわ。そこまで言うなら……………見せてあげる」

---

---

恭子

「あんたはそのまま寝てていいから……こんな感じで……あんたの顔に近付けて………あははっ、なに目えそらしてんのよ。それじゃ見えないじゃない」

恭子

「見えてる？ そりゃあんたの顔の近くでこんなに脚開いてるんだから、パンツは丸見えよね」

恭子

「でも……今から見るのはパンツだけじゃないでしょ。もっとすごいもの見るんでしょ」

恭子

「じゃあ………こうやってパンツに指を引っ掛けて………ぶぶっ、チラチラ見るくらいならずっとこっち見てなさいよ」

恭子

「これが……女の子のおまんこよ」

恭子

「………どう？ 初めて見るでしょ。生よ。無修正のまんこよ。クリトリスまでばっちり見えるでしょ」

恭子

「あ、勃起してる。ちんこビンビンじゃない。これならセックスもできそうね」

恭子

「ふふっ、今からあんたの童貞ちんこ………あたしのまんこで食べてあげる」

恭子

「よいしょっ………あんたはそこで寝てていいからね。どうせ何したらいいかわかんないでしょ。全部あたしがやったげるから」

---

---

恭子

「あははっ、さっきよりギンギンになってるんじゃない？ そりゃそうよね。初めてのセックスなんだから」

恭子

「これが……女の子の中よお……」

恭子

「んっ……はあぁっ……入って、きたぁ……あはっ、あたしも……けっこー濡れちゃってるから……一気に入っちゃう」

恭子

「どう？ わかる？ あんたのちんこ……まんこの中に、入ってんのよ……んっ……！」

恭子

「ほら、締め付けてあげる……んっ……んっ……どーよ、ふふっ、どーよこれ。ちんこが締め付けられてるのがわかる？」

恭子

「あ、でもすぐにイクんじゃないわよ。っていうか中でイったらダメだからね。さすがにそれは却下」

恭子

「いきそうになったらいきそうって言うこと。わかった？ ……じゃあ、動いてあげる」

恭子

「んっ……んっ……んっ……んっ……んっ……んっ、う……ふうっ……そういえば、あ……あたしも……久しぶり、だったっけ」

---

---

恭子

「なんか……ちょうどいいかも……んんっ……  
……いい感じの、とこ、当たる……んうっ……  
……！」

恭子

「あははっ、なんて声出してんのよ。本当に……  
んくっ、すぐに、イかないでよ」

恭子

「んくっ……ん、うっ……奥に、当たってる……  
わかる？ ほら、これ……これ、子宮に当たっ  
てんのよ」

恭子

「……って……ちよっ……バツ、バカ！ 気持ちい  
いからってそんな大声出すんじゃないわよ！  
誰かに聞かれたらどーすんのよ！」

恭子

「意外とね………あんたのちんことあたしのま  
んこ………悪くないみたいよ」

恭子

「んくっ……んっ、んっ、んっ………こうやっ  
て………んんうっ、根元から………搾り上げて……  
んんうっ………！」

恭子

「そうよ、これが……セックス………あ、んっ、ん  
んっ………あんたのちんこ………あたしのまんこで  
擦ってやってんのよ」

恭子

「あ、ここだ………ああ………あああっ………あた  
し、ね、んんっ、今、当たってるところが、  
ふ、あ………いい感じなのよね」

---



---

恭子 「そっ、ここが……気持ちいいって意味……  
んっく、あんたは、どうなの？」

恭子 「んふ、ふふっ、気持ちいい？ そりやそうよ  
ね。初めてのセックスなんだし……んん、興奮  
しまくって……ふ、あっ、ギンギンになっちゃ  
うわよね」

恭子 「ああ、いいわよ。んんっ、あんたのほうから、  
動かなくて、ふあっ、リズムが狂っちゃうし…  
…あ、んんっ、童貞も卒業したばかり、なん  
だから、んっ、んっ、んっ、あたしに、任せて  
おきなさいよ」

恭子 「っていうか、んあっ、童貞卒業おめでとー、  
ん、あんっ、これであんたも、んっく、立派  
な、男ね」

恭子 「あ、立派かどうかはわかんないか。んんっ、  
まっ、どっちでもいいけど、んっく、ふうっ…  
……」

恭子 「それよか、ん、くうっ、ちよとずっ、速くし  
ていくからね。マジで……すぐに出すんじゃない  
いわよ」

恭子 「んっ……んっ……んっ……んっ……ん  
んっ、んんんんっ、く、ふっ……んっ、んっ、  
んっ……んんっ、んんっ、んんんううっ……  
……！……！」

---

---

恭子

「ああ、なんか……思ってたよりも、い、いいかも……んっ、んっ、動くと、ち、ちようどいいところに、当たって……ん、ふっ……悪くないじゃない」

恭子

「きゅって、締め付けた分だけ、んんっ、く……ぴったり、張りつく感じで……あふ、あっ……まんこ、熱くなってきた」

恭子

「はあ、あんっ、でも……ふふっ、ちんこも熱い……あんた、けっこーすごいじゃない、ん、んっく、あんなに出したのに、んくっ、んくっ、まだ、こんなに、んんっ、硬くできるなんて……」

恭子

「まあ、童貞、だったんだから、くうっ……興奮が、あ、んっ、おさまらないんでしょうけど……んっ、んっ、んっ……」

恭子

「これで大量に出たら、あ、んっ、あんた、精液タンクよね、んんっ、く、ふうっ……!」

恭子

「んっ、んうっ、そろそろ、んんっ、スピード上げていくわよ……んっ、んっ、んっ、んんんんっ……!」

恭子

「ぷぷっ、その気持ち良さそうな顔……悪く、ないじゃない、んうっ……!　んくっ、んくっ、う……奥のほうに、当たる……んくっ、子宮に響く、う、ああっ……!」

---

恭子

「ここまで一方的に、するのって、あ、んっ、初めてだけど……ふふっ、はまっちゃいそう」

恭子

「ねえ、どう？ んんっ、あたしのまんこ……あ、んっ、どんなふうに、感じてるか……ん、く、言いなさいよ」

恭子

「んっ、んっ、く……ふう、うんっ……へえ、そうなのね……あ、んんうっ……でも、もつとぎゅってできるわよ……ほらっ！」

恭子

「あははっ、なっさけない声ね、んうっ……女の子みたいじゃない……く、ふっ……！」

恭子

「顔だって蕩けそうな感じになっちゃって……んんっ、く……んふっ、ああ、あたしも、こ、興奮してきちゃう……ん、んんっ、く……！」

恭子

「わかる？ んんっ、まんこが、あ、んっ、どんどん、濡れてきてるの……ん、くううっ……ちんこでわかる？」

恭子

「ん、んんっ、う……何？ また恥ずかしそうにして……んっ、んっ、ここまでやってるんだから、あ、んっ、そろそろ慣れなさいよ」

恭子

「えっ？ 言い方？ んうっ、んっ……ええ、まんこのこと？ まだこういう言い方にも照れてるの？ あんたって本当に……んっく、ふ、ふふっ……！」

---

恭子

「それじゃあ……………こんなふうに抱きついて……………耳元で言ってあげよっか？」

恭子

「あ、でもこの体勢だとあたしは動きにくいから、あとはあんたが動きなさいよ」

恭子

「そう、あんたが腰振ってちんこ……………おちんぽ、動かすの」

恭子

「あ、今、ビクツてした。おちんぽがビクツてしたのが伝わってきたわよ」

恭子

「んふふっ、なに慌ててんの？　びっくりした？　おちんぽって言い方……………いやらしい？」

恭子

「本当はここまでするつもりなかったけど……………なんか……………あんた可愛いから、いっぱい興奮させてあげる」

恭子

「ほら、おちんぽ動かして……………あんたのおちんぽで、あたしのおまんこ突き上げて……………」

恭子

「あ、あんっ、そう……………それでいいの、ん、んっ、ずっと、そんなふうに……………んく、う、動いて」

恭子

「そしたら、あ、んうっ……………もっと、エッチなこ  
と、耳元で言ってあげる」

---

---

恭子

「んう、く、ふっ……そう、そこ、あ、いいわ、あ、おちんぽ、今、当たってるところ、あ、んんっ、おまんこ、気持ち、いい、あ、んうっ……!」

恭子

「スピードは、んく、そ、そのくらいでも、いいし……ん、んっ、特別に、くふっ、あんたの好きな、ように……んんっ、動いていいから……」

恭子

「はあ、あぁっ、ずぶっ、ずぶって、んうっ、おちんぽが、奥に……んんうっ、くる……んふっ、おまんこの奥に、きてるわよ」

恭子

「んう、ふっ……また、変な声出して……んく、う、そんなに、ドキドキするの? んくっ、おちんぽ、とか、おまんこ、とか……」

恭子

「……そう、なんだ。んふふっ、そんなに、ん、んっ、う……あたしの声で、あふ、あ、いやらしい、の、んんっ、聞きたいんだ?」

恭子

「それじゃあ………いっぱい言ってあげる……んうっ、おちんぽ、いいわよ、んっ、あんたのおちんぽ、とっても気持ちいい、わよ」

恭子

「気持ちいいから、んんっ、おまんこで、きゅってしてあげる、ん、うっ、おまんこできゅって締め付けて、んん、うっ、もっと、気持ち良くしてあげる」

---

---

恭子

「だから、あ、んうっ、そう……あんたも、動いて……んく、う、あたしのおまんこ、味わいなさいよ」

恭子

「あ、んんうっ、そう、ちょっと……速くなってきた……んうっ、い、いい感じ、よ、んっ、んっ、んんんっ……!」

恭子

「はあっ……おまんこいい、あ、んっ、おまんこいいわ、あ、おまんこ、いい、おまんこ、お、んうっ、おまんこ、おまんこ、お、おまんこが、あ、ああ、おまんこがいいの、お、ふあっ……おまんこ、おまんこ、おまんこおお……!」

恭子

「ん、ふふっ、興奮した? んんっ、おちんぼが、またビクッてしてんだけど……ふふっ、あんたってわかりやすいのよね」

恭子

「でも、んうっ、悪くないわ、あ、んんっ、本当に、おまんこ、くふっ、蕩け、ちやいそう」

恭子

「ねえ、あんたも言って……おちんぽ気持ちいいって、んんっ、そういうの、ふあ、う、あたしにも、聞かせなさいよ」

---

---

恭子

「あたしももっと、ん、言って、あげる……  
んうつ、おちんぽ、気持ちいいから、あ、おち  
んぽ、気持ちいいって、言ってあげるか  
ら、あ、あ、あ、ああつ……本当にいいの、お  
ちんぽ、擦れて、んんっ、本当に、気持ちいい  
から……」

恭子

「ああ、おちんぽ、いい、ふあつ、ん、おちんぽ  
いい、あ、ああつ、おちんぽ、あ、もっと、ん  
ああつ、おちんぽ、もつとして、ふあつ、おち  
んぽ、あ、そこ、おちんぽいい、から、おちん  
ぽ、ふ、あ、おちんぽ、おちんぽ、おちん  
ぽお、んんああつ、ちんぽちんぽちんぽおお  
……………!」

恭子

「ぶっ、あははっ……はあーっ、さすがに、  
ちよつと……んんっ、あたしも恥ずかしくなっ  
てきたわ」

恭子

「言い過ぎると馬鹿っぽいわよね……って、  
あんたのちんぽ、いきなり硬くなってない?  
今でも興奮しちゃうの?」

恭子

「ふうん、んんっ、別に硬くなる分には、ん  
く、うつ……あたしも、気持ち良くなれるか  
ら、んくっ、いいんだけど……」

---

---

恭子

「ねえ……エッチな言葉も、いいけど……んくっ、ふ、んんっ……もつとすごい事、ん、うっ……してあげよっか?」

恭子

「何をする気? んふふっ、何を、んっ、すると思う?」

恭子

「たとえば……ん、れろっ……こうやって……れろっ、れろっ……耳を舐めてみるとか。ふふっ、ここが、あ、んっ、性感帯の人って、いるらしいし……」

恭子

「せっかく目の前に、んうっ、耳があるんだしね……ん、んうっ……綺麗にしてあげる……」

恭子

「まずはこっちから……れろおっっ、ん、れろっ、れろれろっ、ん、は……!」

恭子

「れろおっっ、れろれろっ、ちゅぶっ、んはあっ……ん、れろっ、ちゅっ、れぶっ、ちゅっ、れろれろっ……! んんうっ、ふうっ、れろっ、れろれろれろっ、ふううううっ……れろれろれろれろれろおっっ!」

恭子

「んふふっ、なうにビクビクしちゃってんの。まさか、あ、んっ、耳で感じちゃってるわけ?」

恭子

「体だけじゃなくて、あ、あんっ、ちんぽまで、ビクビクしてるんですケド」

---



---

恭子

「れろっ、れぶっ、んんっ、感じるなら、れろれろっ、はああっ、もっとして、あげる、れろっ、れろれろれろっ、お、ぢゅぶっ、びちゅっ……！　れぶ、ぢゅっ、んはっ、ああ、ん、れろおっ、ん、れろっ、れろれろれろれろっ……！」

恭子

「ちよっと……ちんぽ、止まってるんだけど？　れろれろっ、こっちはここまでしてあげてるんだから、ちゅっ、ぢゅぶっ、そっちもちゃんと動きなさいよ」

恭子

「んっ、んっ、そう……そんな感じ……れろっ、れろれろれろっ、ん、ぢゅぶっ、れろおっ、っ、ん、はあっ、れぶ、ちゅっ………ん、んっ……また止まってるし……んふっ、そんなにいいんだ？」

恭子

「れろっ、れぶ、ちゅっ、れろれろっ、仕方ないから、れろおっ、こっちから動きながら、ん、んっ、耳も舐めてあげる」

恭子

「はあっ、れろっ、れろおっ、ず、ちゅっ、れろれろっ、ん、れろお、んぶっ、ちゅっ、ちゅぶっ、ん、ぬぶっ、れろっ、れぶちゅっ、ん、はあっ、あ……れろれろれろれろれろれろおっ……っ！」

---

---

恭子 「ぷぷっ、体、メチャクチャ震えてるじゃない。  
そんなにいいんだ？」

恭子 「それじゃあ……反対側もしてあげる」

恭子 「れろっ、れろれろっ、ん、ぢゅっ、れぶ、  
ちゅっ、んはあっ、れろおっ、れろれろっ、ん  
ぶっ、れぶ、ちゅっ、れろおっ、れろおっ、ん  
く、う、んんっ、れろれろれろれろおおっ  
っっ！」

恭子 「どう？ 右と左で、れろっ、ぢゅっ、違ったり  
する？ んんっ、ちゅっ、れろっ、れろおっ、  
ん、ぷっ、れろれろっ、ん、ふうっ、れろおっ  
……！」

恭子 「んふっ、れぶ、ちゅっ、その悶えた感じの声……  
……れろっ、ぢゅぶっ、れろおっっっ、嫌いじゃ  
ないわ、れぶ、ちゅっ、んんっ、れろれろっ、  
んはあっ、ちんぽ、硬い……」

恭子 「あ、まだイかないでよ、れろっ、ん、ここで出  
されたら消化不良になっちゃうから……れろれ  
ろっ、もうちよっと楽しんでから、ね……ぢゅ  
ぷっ、れろっ、れろっ、ん……んぶ、う、れろ  
れろれろっ……！」

---

---

恭子

「んは、あぁっ、んん、う、れぶ、ちゅっ、れろっ、れろれろれろおっ、ん、ぷっ、れろっ、ん、ぶちゅっ、んは、あぁっ、れろおっ、れろおっ、ん、あぁっ、れぶ、う、れぶ、ちゅっ、れろっ、れろれろれろっ、ん、れぶうっ、れろれろれろれろれろれろれろおおろろろろっ！」

---

恭子

「んはぁっ……あははっ、これけっこー疲れるわ……れろっ、でも舐めちゃうけど……れろれろっ、ぢゅぶっ、ん、はっ、れろおろっ、あんたのその声……だんだんゾクゾクしてきたし……」

---

恭子

「ちゅ、ぶっ、れろおろっ、れろれろっ、んふっ、結局、れろっ、どーなの？ 耳で、ん、れぶっ、ちゅっ、感じちゃったり、するの？」

---

恭子

「れろれろっ、ちゅっ……へえろっ、そーなんだ……れろっ、ん、ちゅっ、良かったじゃない。れろっ、れろれろっ、自分の新しい性癖が知れて、れぶっ……！」

---

恭子

「もっと、奥まで……ん、れろおっ……れぶぶっ……奥まで舐めて、れぢゅっ、ん、ぶちやつ……綺麗にしてあげる……れろおっ、れろれろれろれろれろっ……！」

---

---

恭子

「んふふっ、何よ、れろっ、ちんぽ、ビクビクさせちゃって……れろおっ、んぷっ、ん、れぶっ、ちゅっ……れろっ、れろっ、れろおっくっ、れろれろおっくっくっ！」

恭子

「ん、はっ、ふふっ、口の周りべっとべと……あなたの耳もすごい事になってるわよ」

恭子

「そろそろちんぽも苦しそうだし……こっちも本気で腰振ってあげる。……もう体を起こすのも面倒だし、こーやって抱き付いたまんまでいいわよね？」

恭子

「んくうっ……！　ん、んんっ、あ、んあっ、う……ん、ん、んんっ、ほら、どう？　いきなりちんぽの刺激が強くなったのは……んんんっ、く……！」

恭子

「あたしのまんこで、んくっ、搾り取ってあげる、ふ、ううっ、んんっ、ちんぽぎゅってして、んく、う、んんっ、おちんぽミルク、んんっ、びゅくびゅく出させてあげる、う、んんんっ！」

恭子

「んはあっ、み、耳も、また、してあげよっか？　あ、んんっ……れろっ、れろれろっ、ん、ちゅっ、れぶっ、ちゅっ……んくうっ、ふ、はあっ、ああっ、これ、ヤバ……！」

---

---

恭子

「なんですか、ん、くっ、知らない、けど……くふ、あ……ああっ、まんこ、あ、気持ち、い、んあっ……すっごく、いいところに、んくあっ、当たる、ん、んんっ……!」

恭子

「んふっ、あたし達って、んん、れろっ、れろれろっ、相性、ふ、はあっ……れろおっ、いいのかもね……あ、んっ、んんうっ、く、ふっ……!」

恭子

「だから、れろっ、れろれろっ、ちゅっ、れぶっ、まだ……出すんじゃないわよ? れろおゝゝっ、ん、んんっ、あたしが、満足するまで、んはっ、ちんぽ、おっ勃ててなさいよ」

恭子

「っていうか、もっと硬くしなさいよ! んあっ、あ、ふああっ、このまま中出しでいいから、んくあ、んんっ、ずっと勃起させなさいよ!」

恭子

「ん、んっく、あ、何? そんな顔、して、あ、んんっ、中出しで、いいって、言うの、んくっ、く、ふうっ、びっくりしたの? あははっ、今日は、あ、んんんっ、大丈夫、だから……!」

---

恭子

「あんたは、あ、んんっ、余計な事考えてないで、ん、んく、れろっ、れろれろっ、ちんぽ勃ててればいいのよ、ん、れろっ、れろおおくっ、ん、れぶちゅっ!」

恭子

「んはっ、あ、ああっ、いき、そ、あっ……はああっ、童貞ちんぽ、んあっ、たまんないわあ、あ、ああっ、ん、んっ、んんっ、く、んくっ、んくうっ、う、う、うううっ……!」

恭子

「ん、ふふっ、あんたも? あんたも、ふ、あっ、イ、いきそうなの? んっ、んんうっ、いい、わよ、んくっ、あ、搾り取って、ふ、くうっ、全部、ん、んん、う、搾り取ってあげるから……!」

恭子

「耳も……れろっ、れろおっ、ん、ぢゅぶっ、ん、はあっ、れろっ、れろれろれろっ、く、ふうっ、ん、んんっ、れろっ、いき、なさいよ、れろれろっ、ちんぽ、から、全部、れぶっ、ちゅっ、ちんぽミルク、出しちやいなさいよ!」

恭子

「んっ、んんっ、中に、く、ふっ、まんこに中出し、して、いいから、あ、ふううっ、んんっ、せ、せーえき、中出し、ひ、ん、んんう、く、ううう、ふうううんっ!」

---

---

恭子

「んくっ、んくっ、う、ふううっ、く、あ  
ううっ、ん、んんっ、く、ふう、んっ、ん、  
ん、んっ、んんん、んんんうっ、くふ、う、  
うあ、あ、んっ、はあああっ、ああああっ、  
あ、あ、あっ……んはあああああああ……  
……!!」

恭子

「ああああッ……!! ……あ、あっ……熱  
い……ふ、はあ……あ、あ、あああ……  
……ん、ふああっ、入って、きてる……!!」

恭子

「そう、そうよ……もっと……ん、んん、うっ……  
……全部出して……ああ、あたしの……まんこ  
に、全部……まんこの中に出しなさい」

恭子

「もっと、ぎゅってして……んっ、んっ……搾り  
取ってあげるから……ほらっ……こうやって……  
……根本から擦りあげたら……全部出るで  
しょ?」

恭子

「ふふっ、その顔と声……いいじゃない。童貞を  
食べちゃったって実感がわいてくるわ」

恭子

「ああ……もう出ない? 全部出たの? んっ……  
……んんっ……ふふっ、さすがに出し尽くしたみ  
たいね」

恭子

「よいしょっ……はあっ、すっきりした。あ  
たしもイっちゃったわ」

---

---

恭子 「ふふっ、こういうのは初めてだったけど……童貞を搾り尽くすのってサイコー……」

恭子 「うっわ、ドロドロしたのが出てくる。あ、あ……多すぎてこぼれちゃう」

恭子 「これ、このまま出したら床が酷い事になりそうね。でも、この状態でトイレに行くわけにもいかないし……そうだ！ あんた、そこに寝たままでいいから口開けなさいよ」

恭子 「なんでって……ああ、説明してる暇ないから！早く！ ……そう、それでいいのよ」

恭子 「あとは……あんたが出したものなんだから自分で責任とりなさいよね。このまま口の中に出してあげる」

恭子 「はあああ……ほおら、まんこの中から精液出てる……あんたのちんぽミルク、こんなに飲み込んでたのよ」

恭子 「あ、んっ……んんっ……こぼさないように飲みなさいね。……んっ、んっ………んんうっ！」

恭子 「ふふっ、とりあえず全部出たかな。あとはトイレで綺麗にしとかないと」

---



---

恭子

「それじゃ、あたしは帰るから。後始末ちゃんとしときなさいよね」

恭子

「あ、それから……先生に没収された本、あんたが弁償しなさいよ。代金の請求するからね」

恭子

「そうだ。最後にもう一つ……今日の事が忘れられなくて、またちんぽイジメてほしくなったらあたしんとこ来なさいよ」

恭子

「気分が乗ったら……また精液搾り取ってあげるから……」

---